

第3講：64 「やんわり伸ばしたら」

おやさと研究所研教授
佐藤 孝則 Takanori Sato

第3講では、最初に今回の逸話内容を紹介し、主人公の泉田藤吉の略歴について述べた。藤吉はお酒の飲み過ぎから医者に見放されるほどの胃がんを患ったが、「かしの・かりもの」の教理をしっかりと心におさめたことによって、大難から無難にまで身上健やかに導きいただいた。そして、親神様と教祖への感謝の気持ちを一層深め、「たすけ」や「にをいがけ」に励んだ。その後の説明として、「かしの・かりもの」の教理について概説し、最後は環境論的視点から、「やんわり伸ばしたら」とその他の逸話内容について紹介した。

以下に、発表内容の概要についてまとめる。

1. 泉田藤吉の略歴

天保 11 年（1840）5 月 10 日、大阪府東成郡大今里村（現、大阪市東成区大今里）に生まれた通称「熊吉」。4 歳で両親と死別し、東成郡猪飼野の山本家にあずけられ、10 歳まで育てられた。その間、子守奉公などに出されたが、腕白なため断られ、月に 15 回ほど奉公先を変えた。10 歳のとき東成区片江町の清水家の貫子となったが、何らかの事情で清水姓を名乗ることはなかった。

もともと文字も書けず、両親の名前も知らず、自分の名前も「熊」より知らなかった藤吉は、大工や左官の手伝いをしたり、井戸掘り人夫として働いたが、その後は体格も良く腕力も強かったことから、西国巡りの強力となった。

明治 4 年（1871）2 月頃、東大寺二月堂のお水取りに参詣したとき、人の噂で教祖を知り、「おぢば」に参詣したのが最初である。明治 10 年、胃がんを無難にさせていただいてからは、商売の傍らおぢばがえりを日参し、地元の大坂を中心に、「にをいがけ」と「おたすけ」に奔走した。明治 23 年になると、大阪の道を人にまかせ、今度は九州の大分県中津町へ親神の教えをさらに広めるため出発し、多くの人たちを道へと導いた。

明治 37 年 4 月 26 日、おぢばで出直した。

2. 「かしの・かりもの」の教理

藤吉は、「こんな皺紙でも、やんわり伸ばしたら、綺麗になって、又使えるのや。」という教祖からのお諭しを、「この程度の胃がんでも、『かしの・かりもの』の教理を理解したら、大難が小難に、小難が無難になって身上健やかになる」と理解したのではないかと。また、藤吉が「おぢば恋しくなって、帰らせて頂いた」のは、教祖が心の中で藤吉に帰参するよう促されたからであり、教祖が「膝の上で小さな皺紙を伸ばしておられた」のは、藤吉に皺紙をとおしてお諭しをされようとしたからではないかと。それらのことを理解した藤吉は、「喜び勇んで大阪へかえり、又一層熱心におたすけに廻った」のである。

そして藤吉は、「心が倒れかかると」、「我と我が心を励ますために」水ごりなどさまざまなことを試みながら、「かしの・かりもの」の教理について思案を巡らしたのではないかと。

さらに「何一つ要らんというものは無い。」という教祖からのお諭しは、「神のからだ」であるこの世の森羅万象は、「陽気ぐらし世界」実現にとっては必要なものばかりで、無駄な

ものは何一つない。すなわち「何一つ要らんというものは無い。」のである。身上の障りは、親神様が「かしの・かりもの」の教理を私たちに再考させ、悟らせるために示されたメッセージであり、この世に実存する全ては必要なものばかりで、「何一つ要らんというものは無い。」と理解したのではないかと。

その考え方は、現代社会に当てはめても同じである。高齢社会が到来した日本では、高齢者が相対的に増加したことによって、労働人口は減少し、若齢層の負担が増加している。社会ではそのことをネガティブな論調で取り上げるが、むしろこの状況は「陽気ぐらし世界」実現にとって必要で重要な過程、とポジティブに捉えるべきではないかと。高齢者は誰一人として不必要な存在ではなく、むしろ必要な存在としてあるはずだ。だから生きているのである。そのためにも、高齢者だからこそ果たせる役割はあるはずである。「陽気ぐらし世界」実現のためには何ができるか、何が必要かをもうと考えるべきである。

3. 『逸話篇』の環境論的視点

(1) 112 「一に愛想」

この逸話は、教祖が、飯降よしゑにお聞かせ下された話である。その中で、教祖は「菜の葉一枚でも、粗末にせぬように。」「すたりもの身につくで。いやしいのと違う。」と諭された。

菜の葉一枚でも可能な限り使いきり、食べきることは、それが捨てられるさいの生ごみの減量化につながり、食べられる野菜に対する礼儀にもなる。また捨てられてしまうようなものでも、可能な限り食べ切ればそれは私たちの血肉となり、結果的に野菜の命は人間の命につながっていく。生命の連続性、生まれ変わりがここに表現されていると考える。日本の高度経済成長期に謳われた「使い捨てが美德」は、今ではすっかり陰を潜めている。むしろ、国際社会では「物は大切に」が循環型社会の基本として広がりつつある。

また教祖は、捨てられようとする食べ物を、あえて最後の最後まで食べ切ろうとすることは、決して卑しい行為ではないと断言されている。熟考すべきお言葉である。

(2) 138 「物は大切に」

教祖は、反故になった罫紙を監獄署に差し入れてもらい、コヨリを作って一升瓶を入れる網袋をお作りになった。そして監獄署を出てお帰りのさい、その網袋を仲田儀三郎にお与えになった。その時、教祖は「物は大切にしなされや。生かして使いなされや。すべてが、神様からのお与えものやで。さあ、家の宝にしときなされ。」と仰った。

物を大切にすることは当然のことだが、それを生かして使うことの大切さ、重要性も説いておられる。「物を大切に」する心は日本社会の風土を背景に育まれてきたのは事実であり、それが日本における匠の高い技術性を支えてきたことも事実である。「物を大切に」する心を世界に広めるためにも、私たちようばくの使命は重要で、その役割は大きい。